

第1回 おおだ教育魅力化推進会議「おおだ未来☆夢ランド」会議録
【概要版】

日時：2022年6月16日（木）14:00～16:00

出席委員

	委員名(敬称略・五十音順)	備考
1	○ 伊藤 謙	大阪大学総合学術博物館 講師
2	○ 梶谷 美由紀	株式会社「necco」代表取締役
3	● 佐藤 万里	脚本家・執筆業
4	○ 武田 祐子	大田市教育委員会 教育長
5	○ 龍岩 明彦	石見銀山テレビ放送株式会社 副社長
6	○ 仲野 義文	石見銀山資料館 理事長
7	○ 福本 理恵	株式会社「SPACE」CEO
8	● 細田 次郎	継伝制作のニッチノーマス 代表
9	○ 松浦 利幸	国立三瓶青少年交流の家 次長
10	○ 松本 一郎	島根大学大学院教育学研究科 教授
11	○ 三島 裕貴	島根大田青年会議所 副理事長
12	○ 森山 登美子	社会福祉法人亀の子 施設長

(●はオンライン参加)



【武田教育長】

人口減・少子化・高齢化が進む大田市だからこそ、一刻も早く抜本的な教育改革に着手しなければならない。そのために、2つの視点を持っている。1つは、大田市の持つ多種多様な宝をもっともって未来の子育てや教育に活用していきたい。2つ目は、大田の子どもたち一人ひとりに、もっと多様な教育の受け皿・選択肢を、創っていくということ。そのために、あらゆる人を巻き込み、あらゆるものを取り込み、新しい発想で、大田市教育の更なる魅力を創り出していきたい。

教育は総合力。教育月間・県立高校のコンソーシアム設置・市内全ての小・中学校でコミュニティスクール化は、地域の皆さんと学校が一緒になって、学校を魅力的にしていくもの。そして、いよいよ「おおだ未来☆夢ランド」を開設する。委員の皆様からどんな夢が語られ、大田市の教育にどんな提案がなされるのか、非常に楽しみだ。その中の1つでも2つでも、「見える化」を図っていききたい。

【福本理恵委員】

「ゴッドハンズプロジェクト」を、この大田市から発信させていただきたい。手で何かモノづくりをしていくのは目の前にモノができていく、それにより自分が生み出したものが実感しやすく自信を取り戻しやすい。世界に二つとして同じ手はないからこそ、自分にしか生み出せない価値がある。それを感じてくれる、そんなプロジェクトをこの大田市で始めたい。モノづくりの方々のところに子どもたちが弟子入りのように入っていく、地域の中で文化の伝承をしながら、子どもたちも自信を取り戻し、その中で教科の学びもしながら、学ぶ意味も取り戻していけるものにした。この事業は今年度の「経産省未来の教室」実証ということで進めていけたらと考え、対象は小学校5年生から中学3年生までで、不登校傾向にある子どもがぜひ参加できるような、ワクワクしたプロジェクトにしたい。学習は不登校になってしまうと空白状態になってしまう。学習空白をなくしインターンをしていくことで、実学的な学びを保障する、そして社会ともう一度接続されることが同時にかなえられるプロジェクトにしていくことが必要になってくる。そして、大田にもう一度戻ってきたいと思える精神的な第2の家ができる、そんなゴールを目指したい。プロジェクトの流れとしては、

- ①サイトの中で様々な手仕事・ゴッドハンズの紹介を行う。それを全国に広げていきたい。
- ②「オムニバスツアー」といって職人さんたちに話を聞く。オンラインを使って電話会議のような形で質問していく。リアルな声で、なぜその道を選んだのか、どういう苦労があるのか、どんなやりがいがあるのかといったことを話していただく。ここでは、様々な手仕事にかかわる多様な人の話を聞くことを想定。
- ③職人さんのもとで10日間ほど生の仕事場に入り実体験。これは10名程度で1人の職人さんについて行う。

大田市の文化を担っていかれるゴッドハンズの協力を得ながら、大田市の子どもたちがこれらの方のもとへ来る。もしかすると全国の子どもたちが、この職人さんのもとへ行きたいと、大田を目指してやってくるような全国的なムーブメントをつくっていききたい。

【武田教育長】

全国でも喫緊の課題になっている不登校対策ですが、学校でできにくい体験、本物の仕事ぶりに子どもたちが触れ、また家族以外との心の交流等々を通して、自分の自信を取り戻していく。そんな夢あるプロジェクトを、今年度この大田市で、新しい形の大田市発信の教育スタイルとして、全国に発信していききたい。

【龍岩明彦委員】

不登校の子どもたちもチャンスが得られる、しかもそれが大田からというのは素晴らしいこと。成人の不登校の子をかかえた親は、自分もこのまま死ねないと悲惨な気持ちがあるわけで、そういうことを含めて素晴らしいことを考えていただき、市民として感激と感動した。

【松本一郎委員】

全ての人を取り残さず教育したり前に進めたりしていくのに、ゴッドハンズというのはいいと思う。大田を外から見ている皆さんと中から見ている皆さんがいて、ここで協力していくのがいいと思う。

【伊藤謙委員】

私も小学校・中学校・高校・大学もかもしれないが、学校が大嫌いだった。何が私を助けてくれ

たかという、自分が好きな鉱物のいろいろなつながりの中で、年代を超えた、老若男女問わずそうした方との交流が、私が学校というものを嫌いでも、教育の現場から逃げ出さずに続けてこられた大きな原動力になった。地域には、素晴らしい地域資源が分らずに眠っている場合がある。それを、我々外の視点から客観的に見せてもらい、こんな素晴らしいものがあるよと再発見していくのが、我々委員としての役割とも思う。魅力ある場所のプログラムを様々つくらせてもらい、大田の新しい教育の中に活かしていきたい。

【梶谷美由紀委員】

このプロジェクトも応援しているが、不登校に関して、岡崎市で中学校の全てで「F組」をつくっていることをニュースで知った。大田市でも自習室のような形で、教室に行けない子どもが、ちょっとよその教室で勉強するというのはあるが、そうではなく、校内にフリースクールがつけられている。F組は一つのクラス。教室にいられない子どもが3日間だけそこで過ごすということもできて、F組というのはクラスとして対等なんです。通常の学校では、教室に入れない子がいく自習室というのは、落ちてきた感じのイメージになるが、そうではなく、ただF組で過ごし、戻りたくなったら教室に戻るができる。F組があることで長期に休む子が少しずつ減っているという数字が出ている。この取組はとてもいいと思うので、考えてみてほしい。

【武田教育長】

特別な子どもたちという固定的な観念を崩しながら、自由に外に出てもいいんだ、その空間を活用していくという発想でつけられていると思う。みんながそういうふうに「やろう」と言えば、そのことはすぐにできそうな気がする。

【伊藤謙委員】

私みたいに学校の中だけで学べない、それ以外のものを求めてしまう人たちの集まる場所は、地域にあった。それを今、F組の話は積極的につくっていかうとする動きなので非常によいと思う。私もそういう方にたくさん救われたので、こういう事例が大田でできれば、地域の発展や将来性に大きく貢献できるのではないかと感じた。

【福本理恵委員】

特に不登校支援というのは、総合的に様々な要因がかかわっているの、スクールソーシャルワーカーやカウンセラー、民生委員の方、特にNPOの方々が入り、かつ連携して授業の仕組みができると、面でうまく子どもたちをサポートできるのを実感していた。だから、可能な人たちが入れる仕組みづくりをどのようにしていくかを議論できれば、より夢が広がると思う。

【武田教育長】

もう一つの視点、大田市の豊かな自然や歴史文化の面で、どなたかご提案いただければと思う。

【森山登美子委員】

大田市も、こうして障がいのことを受け入れる土壌ができてきた。障がいを持っていても関係なく、地域で当たり前生きていくということが示せる大田市になったので、福本先生のプロジェクトを立ち上げるのに持って来いではないか。そこで、大田市にどれくらいの不登校がいて、どういう状況なのかを説明してもらい、具体的にどう動いていくか考え取組んでいただきたい。

【俵主査】

昨年度の状況で、小学生は全体で1500名ほどのうち不登校は21名、中学生は41名、どちらも増えている状況だ。

【武田教育長】

これは完全に不登校だが、学校に馴染みにくい子どもたちも含めると、100名強になるかと思う。小学生が1500名、中学生が800名の市ですから、1割弱になるかと思う。大田市としては、今年度特に学力の低下についても非常に大きな課題と考え力を入れている。それはあくまでも学校に来れている子どものケアであり、学校に来れない、もういっぱいいっぱいであるという子ども

たちに向けたケアは何だろうかと思ったときに、今ここで話させていただいたプロジェクトこそ必要ではないかと強く思った。

【松浦利幸委員】

今考えられているプロジェクトを、学校現場にどのように伝えていくのか、まだまだそういうことを知らない教員が多く、閉鎖的な学校現場だから、地域を活用しようと、もっともっと PR しなければ、これなら頼ることができるんだという教員の安堵感にはつながらない。ベクトルを、地域の方々に頼る方向にもっていくには、どうしたらいいのかということをお大田市全体で考えていただきたい。地域の方々にも、教員を助ける・学校を助けるという意欲を見せていただくことが、学校と社会教育とのつながりになると感じている。また、自己有用感という、私は誰かの役に立っていると感じられる子どもたちを増やせば、自信が生まれて、人とかかわることの楽しさを覚えていくんじゃないか。それを、地域でどう体験させてやれるかということを考えていく必要がある。体験活動というのは机に向かって授業を受ける思い出よりも、一生心に刻まれるもので、体験を通じて得られる達成感、不登校の子どもたちにも大きく影響していくと考える。教員から地域の方を頼るというのは敷居が高すぎる。大田市という地域を頼る敷居を低くすることをアピールいただければ、学校現場も助かると感じた。

【梶谷美由紀委員】

全く逆の立場、地域のものとして発言したい。ある先生、熱意のある先生とは授業が作れる、その学年で、その時は。その先生が異動し、担当が替わると途切れてしまう。こちらは待っているし、毎年やってもいいが、そこが仕組みになっていない。地域側からしたら待っていて、手伝えることは手伝いたいし、地域のいいものは知っているのかかかわっていきたいが、学校の壁が破れない。こちらがどんどん提案することで、先生の負担が増えるのではないかと遠慮している。私たちは先生の負担を減らしたいと思っている。大事だと思うのは、先生の負担を減らすことと、地域側で仕組みにしていくこと。学校にかかわっている地域の人とその仕組みに入っていかなければ先生は異動していくので、ある学校を魅力化していこうとしたとき、先生主体だと続かないというのが問題だ。そこを是非考えてほしい。部活動は、得意な人はやればいいが、顧問をどんどん外部に委託したらいい。全部学校の先生がやる必要はないと思う。

【松本一郎委員】

学校では去年こんなことがあったということを残す。どこの学校でも残すが、残したものが活用できるように、このプロジェクトでは魅力を伝えていくことが重要。社会に開かれた教育課程と3年前から言われ、地域の人と一緒に考えてくださいという追い風が吹いている。追い風は吹いているが、具体的にどうしていいのかわからないのが今の先生。「分からない」と、我慢せずに言われたらいいと思うし、こういう情報を共有できたらいい。松江市のある小学校でビオトープをつくった時に、クラスの中で人と話すのが苦手な子が、池の中の生き物とは会話ができる。それを担任の先生は驚かれた。その子はビオトープを通してちゃんと育って、今学校の先生になっている。大田だったら、そういう自然もあるし、そんな事もできると思った。

【伊藤謙委員】

研究者のやっている研究が、地域のブランド化というか、地域の価値の創造につながっていく枠組みがあると、非常にやりやすいのではないかと。何か一つの枠組みに組み込んでいくことが、持続性という意味では重要だと思う。

【福本理恵委員】

自然体験・自然リソースというものが、先生自身を癒し学び続けられるような教材として、癒しの資源として組み込めるような教員研修は日本でもない。だから、そういう教員研修がすごく必要だとうたいながら、他の県の先生方にも、大田に行くともものすごく面白い活動をつくっていける、リフレッシュして学校へ戻っていけると、モデルとして発揮できていけば、教育の町おど

を発信していくことにつながる。もう一つは、DX化・システム化していくことが、本当に有効だと感じている。いろんな経験が次の世代に短期間で伝達できるような仕組みも、システムを使えばうまく回っていく情報連携ができる。チーム支援としていろんな失敗例・成功例の中から、こういうスキルアップができれば、届かなかった支援を届けることができるようになると、情報を連携できる仕組みが必要だ。もう一つは、予算組である。市民に応援してもらって、スクールコラボファンドというお金を募りながら、町の中で集められた予算が、また違う形で町におりていけば、さらに町の人たちがかわれる余白を生んでいく好循環を生むことができる。だから国に頼らず、自分たちで集めていくことにも仕組みが必要だと思う。

―
(休憩)

―
【仲野義文委員】

石見銀山の世界遺産登録が今年 15 年になるということで、銀山学習の在り方も考える時期に来ている。世界遺産は本来、人類共通の財産なので、誰もが学べる場所にならなければならない。その観点で、学習の在り方を見直していく。先ほどあったように、自分たちが社会に必要なということ、周りの我々がどうやって気づかせていくか、そのプログラムをきちんと組み立ててやっていくことが重要だ。石見銀山とか世界遺産というのは、資源というと観光ばかりが目されるが、実は教育資源ということももちろんあり、もう一つ文化財の活用として、福祉の面でどう活用していくかということも、これから考えていかなければならない。つまり、多様な文化財の活用ということを考えていく必要がある。とりわけ今回は、教育資源の中の人に注目されているので、今までとは違う新しい銀山学習の取組につなげていけると思う。

【佐藤万里委員】

私はミュージカルだけが大切だとは思っていない。大切なのは、子どもたちに選択肢はたくさんあるということを伝えることだと思う。また、不登校でなくても居場所がない、でもそのことを発信できない子どもたちもたくさんいると思う。その子たちに居場所はいっぱいあるということ伝えてあげたい。いくらでも進路変更はできるんだと伝えてあげられるような、そんな提示をしてあげたいと思う。先ほど、お金を集めてくる手段がいろいろあるということがあったが、国の予算、自治体の予算がなければ、自分たちで集めるという選択肢がある。そういう視野の広さをもつことが大切だと思った。それと、大田市ではふるさと教育が充実しているが、学ぶことがたくさんあると思った。石見銀山・日本遺産のことには目が向いているが、それ以外にもいい所、歴史のあるところがたくさんある。なかなか目につかないものにも、いろんな歴史がある。それをどう広く教えていのか、それも次の課題になってくると思う。仲野先生の話から、視覚障がい者が文化財に触れられる取組はとても大切だし、同時に、足腰の弱い方・高齢者や障がい者が文化財を身近に感じるための整備、ただし景観を壊さないことが大切になると思うが、そこを考えていくことが大切だ。私が大田を訪れたときに、いつも素敵だと思うのは、学校帰りの子どもたちが、知らない人間である私に「こんにちは」「さようなら」と声をかけてくれる。いったい誰が、どういうふう伝えて、子どもたちが自然にやっているのか分からないが、そういう習慣は大切にしてほしい。教育レベルでは測れないところのよさ、これを大切にしていってほしい。それと、大田の昔ばなしが今、なかなか子どもたちに伝わっていない。昔話や伝承を題材にしても、「こんな話があったんだ」「知らなかった」という声をよく聞く。こういうことも広く伝えていくような、そんな取組ができるといいと思う。

【三島裕貴委員】

学校で学ぶこと以外に、自分が将来どんな人になりたいのかなど、地域の大人と触れ合うことで豊かな心や郷土愛を育むことが、大田市の明るい未来につながると思う。地域との連携ができて、

大人との触れ合いができる、そういうイベントがこれからも大田市内で行われるのはいいことだと感じている。

【松本一郎委員】

世界遺産という宝がここにあるということ、教育現場・地域の皆さんが大切に思って、教育に活かしてくれるといい。

【森山登美子委員】

大田はもともと、そういう文化人が集まっていたところだった。私たちは先人に対して本当に失礼なことをしたと思う。また大田にはお宝がいっぱいある。それを知らないのが、私たち大田市民ではないかと、目を覚まさないといけないと思う。あまりにも井の中の蛙でいることは、知らないが多すぎて、残念だと思う。大田の一人ひとりが宝、子は宝だ。今日出たプロジェクトができれば、何か魅力のある町にできそうで楽しみだ。

【梶谷美由紀委員】

学力を上げるということ、根本的に考えてみたらいいと思っている。課題って何だろう、というような根本を、現場で話し合っていたきたい。校則についても、校則をそもそも考える。子どもたちが考える機会が、自分で考える力になると思う。例えば白い靴下、なぜ白い靴下なのかを根本的に考える、そういう機会を増やすことが、自分で考える力になると思っている。ICT教育でも、手段としてタブレットを使うやり方ではなく、機械がはいったら、アプリを使って教科の勉強をすると面白いと思って、自分で学ぼうとするような道具の使い方をするといいと思う。そういうことで、学力は上がっていくんじゃないかと思う。

【伊藤謙委員】

歴史・文化・資源・人の話が出て、ヒト・モノの話が出たが、お金の部分が非常に重要だと思っている。石見銀山に関しては、あれだけの景観・文化的背景が、なぜ残ってきたのか。素晴らしいベンチャーが生まれてきたことに理由があるのではないか。そのようなベンチャーを生み出した理由は何か。彼らのような人たちは、どのようにして地域の中に生まれ、成長し、また戻ってこられたのかを、こういう研究会で検討し、そして彼らのような人たちをどうやって生み出すのかを議論できたらと思っている。今後の検討課題の一つにしてほしい。

【仲野義文委員】

このプロジェクトを進めていくにあたって、持続可能な形でやっていくためにはすごいお金がかかる。また、環境をどうやって整備していくのかという話は避けて通れない。市の財政も厳しくなり教育予算がカットされるかもしれない。そういうなかで、子どもたちの教育のレベルを高めるための環境整備は、やはりお金にかかってくる。例えばふるさと納税を受け皿にするとか、クラウドファンディング。一方で、お金が集まらないというのはどういうことか。それは、計画そのものがよくないんじゃないか。行政の予算のなかだけで考えるのではなく、もっと広い範囲でお金をどう調達していくかを、そろそろ真剣に考えないといけない。お金の問題は避けて通れない。どこかできちっと、この会でも議論していただければと思う。

【福本理恵委員】

人はどんなふうに幸せになっていくんだろうかということ、みんなが持ち寄って、知恵を出し合って語れる領域が教育の魅力。そこで、何か具体的なものを課題として事例をあげつつ、解決策をもっとシェアし、違う枠組みもあわせてもう一度整理しなおしたとき、本当はいい組み合わせが既にあったというようなこともある。そんな視点でもう一度、いい魅力をここでとり上げて、どういうふうに再分配・シェアしていったらいいだろうかのような話が、未来を創っていくような感じがする。

【松浦利幸委員】

学力について大田市はどう考えられるのか。学習指導要領が全て変わり、探究活動が教科でも言

われ始め、現場の教員はすごく戸惑っている。大田市が考える真の学力は何なのかという議論を、今後していただけると助かると思う。

【武田教育長】

大田市に新しい教育の風を吹かせていきたい。ただただそういう思いでいたが、そのチャレンジを、頑張ってみよと応援していただけのように思っている。子どもたちが、自信を取り戻せるように、また居場所がいっぱいあるように思っていたが、委員の皆様からは、教員のリフレッシュ・地元の後継者育成や関係人口というような、多面的な視点も頂戴した。またそれを持続可能にしていくための予算をどうするのか。ほかにも、部活動の外部委託・働き方改革、教員の人材育成のようなところにも、たくさんのご意見を頂戴した。先ほど出ていたが、これを持続可能にしていく予算の関係、今ある資源を、子どもだけでなく大人も幸せになるためにどう循環させていくのか、というテーマをもう一度加味して、次回は、ややテーマを絞って皆さんと協議できたらと思っている。本日はどうもありがとうございました。

